

文献紹介 —日本—

墓田桂・杉木明子・池田丈佑・小澤藍編著『難民・強制移動研究のフロンティア』

(2014年、現代人文社)

本書は難民・強制移動研究の「新たな境地、〈フロンティア〉を開拓する試み」(本書序論)として、23名の研究者・実務家らの論稿を収録した力作である。各論稿では、比較的新しく、学際的かつ論争的でもある難民・強制移動研究の到達点が、「人道の理念」や「他者へのシンプルな想像力と行動力」などを基盤にしつつも批判的姿勢とともに描かれ、各執筆者の研究への精力的な姿勢が伝わる一冊となっている。現時点での同研究の到達点を概観するための必読の書であることは間違いない。本書は序論に続く4部により構成されている。序論では、墓田、池田両氏が、「強制移動」概念研究の不十分さ、庇護と正義の関係、というそれぞれの視点から、本書の全体像を示している。いずれも問題提起を含め、序論にとどまらない本書の核心部分といえる。

第1部では、難民・強制移動の「史的・制度的展開」に焦点が当てられる。国際機構創設期の「難民」概念に焦点を当てた舘論文、第二次世界大戦後の移民・難民の国際レジームとその限界を議論する柄谷論文、無国籍者をめぐる実務・学術研究の状況を概観する金児論文は、いずれも難民・研強制移動研究の基礎知識を簡潔に提供している。またその後続く、赤星論文、副島論文、小坂論文は、UNHCRの政策を具体的に検討することを通じて、国際機構が直面する現実と今後の展望を示している。

第2部は、地域的な取り組みを手掛かりに、難民保護の事例研究を扱う。日本の難民支援の課題を社会統合の観点から議論する石川論文、同じく日本を事例とし、難民の第三国定住事業の現状と課題を取り上げる滝澤論文、脱北者(北朝鮮難民)を題材に韓国における難民保護政策を考察する松岡論文、UNHCRとタイ政府の難民保護をめぐる議論に焦点を当てる小池論文、中南米における「庇護の『伝統』」から、難民保護の新たな規範の可能性を読み解こうとする加藤論文は、いずれも難民・強制移動研究が取り組む課題の普遍性と各事例が抱える地域的な特殊性をどのように結びつけるかを展望するもので、大変興味深い。なお、日本国内での法的議論に関しては、渡邊彰悟ほか編『日本における難民訴訟の発展と現在』(現代人文社、2010年)も参考になる。

第3部「難民・強制移動をめぐる多様な課題」では、論点を現状の課題に移し、それぞれの視点から研究の展望が示される。ここで12研究全てを取り上げることはできないが、事例研究と理論的考察双方の関係を理解し、難民・強制移動研究の幅の広さを実感できるであろう。他方、研究の「多様さ」は「迷路」となりやすいことは否めないことから、読者にはまず、自身の関心がある章から手に取ってみることを勧める。章を読み進めていく中で、第1部や第2部、そして第3部を踏まえた全体像が見えて来るはずである。

第4部は本書のユニークな部分とも言えるだろう。複数の難民当事者へのインタビューを解説と共に収録し、当事者の声を「実感」できるものとなっている。加えて、彼(女)らを支援するNGOや「研究機関の紹介」も併せて紹介されており、研究や実務にも有用な内容となっている。

さて、結びに変えて本書の展望を示しておきたい。本書で示された視点は、いずれも現在抱えている問題とその解決を目指すものであるが、他方で「現状」を語ることには常に限界が付きまとう。「残されるのは、ただ、フロンティアだけである」(あとがき)とあるように、難民・強制移動研究には、そもそも「難民」や「強制移動」そのものを根底から批判的に検討することも必要である。こうした視点の上に「フロンティア」を構築することが出来るのか。この点こそ、本書が読者に問いかけている問題意識である。本書をいわば「たたき台」とし、難民・強制移動研究の議論がより活発になればと願う。

藤本俊明(神奈川大学講師)